

編 集 後 記

2004年11月15日、米軍海兵隊はイラクのファルージャを100%掌握したと発表。その二日前、ファルージャに侵略した海兵隊員が、モスクにいた非武装の市民を、「こいつ、死んだふりをしている」と言って射殺し、その映像は世界中に流れた。

今から半世紀以上も前の1940年、「世界は破局に向かっている」と、その絶筆の作品「歴史の概念」に書いたのはヴォルター・ベンヤミンである。「歴史の概念」が書かれた同年9月、ユダヤ人である彼は、アメリカへの亡命途中、ピレネー山脈を越えてスペインに入国したところで、強制送還の恐れの中かで自殺する。そのベンヤミンは断言する。時代の支配者とは「いま地に倒れているひとびとを踏みにしてゆく行列」を行進する者であり、歴史は進歩するものではなく、それは「野蛮のドキュメント」であると。

2003年3月に始まったアメリカのイラクへの攻撃は、すでに少なくとも10万人のイラク市民を死者としただろうといわれている。そして今もなお、「野蛮のドキュメント」は続いている。ベトナム戦争を描いた映画「フルメタルジャケット」で、戦死した自国の兵士を、WASTE(ゴミ)と呼んでいた米兵たち。その精神的荒廃から立ち直ることなく、「イラク国民に民主主義を、人権を」といって、アメリカは非人道的行為を行う。彼らは、アウシュビッツの、ヒロシマの、ベトナムの歴史から何も学ぶことなく「野蛮のドキュメント」を続けている。

しかしこのドキュメントの出演者はアメリカ国民だけではない。プッシュ政権に忠実に従う、この日本の政権下の国民であるわたしたちもまた共演者であり、「野蛮のドキュメント」の行進者の一部である。それゆえ、テロリストの残虐な行為を「非人道的」と言って糾弾することができるだろうか。私たちは純粹無垢(イノセント)な歴史的主体ではないのだ。

「歴史の概念」のなかに、パウル・クレーの版画「新しい天使」を紹介する文章がある。そこでベンヤミンは、天使が歴史の強風に運ばれる様子を次のように書いている。

「かれは顔を過去に向けている。ほくらであれば事件の連鎖を眺めるところに、かれはただカタストロフのみを見る。そのカタストロフは、やすみなく廃墟の上に廃墟を積みかさねて、それをかれの鼻つききへつきつけてくるのだ。たぶんかれはそこに滞留して、死者たちを目覚めさせ、破壊されたものを寄せあつめて組みたてたいのだけれど、しかし樂園から吹いてくる強風がかれの翼にはらまれるばかりか、その風のいきおいがはげしいので、かれはもう翼を閉じることができない。強風は天使を、かれが背中を向けている未来のほうへ、不可抗的に運んでゆく。その一方ではかれの眼前の廃墟の山が、天に届くばかりに高くなる。ほくらが進歩と呼ぶものは〈この〉強風なのだ」。

廃墟の歴史に立ち会っていること、その事象(Sache)から目をそむけてはならないこと、それは教員たちの知的誠実さの証である筈である。

2004年 行く秋 水谷千鶴子